秀吉の後継者

世に在らぬヒト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秀吉の後継者

【Ｎコード】
Ｎ８４８３Ｘ

【作者名】
世に在らぬヒト

【あらすじ】
戦国時代は、終焉を迎えようとしていた。一人の思い付きが歴史を変えていく。時代小説として群雄像を紡いでいきたいと思います。

第一話　天正１６年（１５８８年）　２月　石田三成との対面（前書き）

フィクションです。また歴史を元にしておりますので、参考にした出版品ｅｔｃと表現が被る事もあるかと存じます。予めご了承ください。

第一話　天正１６年（１５８８年）　２月　石田三成との対面

天正１６年（１５８８年）２月　石田三成と対面

その日何時ものように、山口修弘と共に剣舞を楽しんでいた。
羽柴秀俊にとって剣舞は、日課で有り楽しみであった。学問にも秀でていたが、時折来る大人達の影響で武芸が大好きとなっていたのだ。優しく訓練をつけてくれ、褒めてくれるのだ。それが堪らなく嬉しくて、暇さえあれば行っていた。

「若ぁ。関白様のお呼びでござる。行儀には、くれぐれも気を付けて下され」
剣舞の最中声をかけたのは、３０代後半の顔長な利発そうな男であった。
この男の名は、山口宗永といい山口修弘の父親である。武芸だけでなく学問にも秀でており、性格は頑固一徹に尽きた。信長の教育係であった平手正秀のような人材として抜擢されていた。関白とは、天下の半分を領有する豊臣家の当主、豊臣秀吉のことである。

「へぇ、珍しいね。はは様でなく、とと様がお呼びとは。怒られるのかな」
「それは、若の態度次第ですぞ。剣舞も学問もよいですが、礼儀作法をしっかりしてください」
「解っているよ、宗永の顔に泥を塗るつもりはない。でも本物なら塗るかもね、ははは」
側女に顔の汗を拭かせながら、着替えに腕を通した。
羽柴秀俊に好意的な者は、信長公の再来と褒めた称えた。織田信長が自害した年に、生を受けたからだ。また穏やかな容姿と違い、かなり烈しい所の有る子供であった。そういう部分も幼少時の信長に

よく似ていた。また余り好意的でない者は、礼儀作法のみを評価し近寄る事はなかった。

住まいは聚楽亭（ジュラクテイ）といい、豊臣秀吉の政庁兼邸宅である。居住区を中心に、防御陣地や駐屯施設があり、その周辺には堀を巡らせてあった。豪華さを好む秀吉らしく金箔瓦などがふんだんに用いられ、さながら金銀御殿のような建物となっていた。聚楽亭を囲むように大名屋敷、武家屋敷、平民屋敷という順に配置されていた。【快楽の数多集まる都で、不老長生したいものだ】と秀吉の発言で建設された夢の御殿である。

「羽柴秀俊公の御なり」

歩くたびに板が揺れた。下の者ども額を床にこすり付けるのだ。高々６歳の小僧に家臣一同までもひれ伏した。豊臣家第一位継承権者となっていたからだ。秀俊は一人一人の顔を見渡し、気になる男がいた。媚びへつらう者ばかりの中で、頭を少し上げてこちらを眺めている若者がいたのだ。この若者こそ、有能な吏僚として活躍する石田三成であった。その時２８歳。これが初対面であった。媚びへつらう者が多い為、羽柴秀俊は傲慢になっていた。

「よう来た、よう来た。もっとちこう寄れ。そなたには、儂の代理を任せたいだぎゃ」

豊臣秀吉は豪華絢爛な宮殿に招き、経済力と軍事力を天皇に見せつけたかった。大領主らに忠誠誓わせる誓紙を出させ、豊臣の力を天皇に知らしめる役目を秀俊に仰せ付けたのだ。責任重大であることは、幼子の秀俊にも解っていた。

天下の半分を領したものの、豊臣秀吉の権威が弱かった。成り上がり者の領地では、たとえ領土が広く、主君が勇敢でも、主将が戦い

に敗れて自決すれば、その家来は散り散りになるか、降伏する時代なのだ。また織田信長の孫・三法師の後見人という名目で織田家の勢力を継いでいた為、彼が成人すれば領地を返還する義務が生じる恐れが有った。織田一門がその事で結束した場合、織田家へ政権返還を求められる事は容易に想像された。そこで豊臣秀吉は、権威づけに関白職を求め得たのだ。人臣最高位である関白に逆らう事は、朝廷に弓引く逆賊として処罰できるのだ。秀吉は、謀反を恐れていた。あれだけ重宝された明智光秀でさえ裏切る世の中なのだ。綱渡りの天下運営する秀吉を、孤独へ孤独へと追いやった。

「若、関白様の御用向きはどうでしたか？」
心ここにあらずのような状態が気になり、山口宗永は言葉をかけた。
耳に入っていないようで、羽柴秀俊は素通りし部屋に籠るのであった。
側近として仕える息子に問うた。
「若の様子を報告せよ」

大領主を引き連れ秀吉の代理として天皇と謁見する事。
秀吉に重宝されている、石田三成を気にしていた事などを報告した。
石田三成は、兵站に長けた人物で、戦場の兵糧番ともいえる存在であった。食糧なくば、戦争はできないのだ。

第一話　天正１６年（１５８８年）　２月　石田三成との対面（後書き）

大領主＝５０万石以上の大大名を指す。
兵站・・・物資の補給・物資の輸送等

第二話　天正１６年（１５８８年）　４月　天皇との会談

天正１６年（１５８８年）　４月１４日　１８：００

豊臣秀吉が天皇の権威を最大限利用する為、御所にまで迎えに行った。そして、みずから天皇の裾を取って人力車への移乗を手伝うや、大地が唸らんばかりのどよめきが起きた。前例でさえ、将軍が自邸の門外で迎えた位しかなく、天皇の裾を取るなど考えられない行為だったのだ。その為、誰もが驚嘆せざるを得なかった。

天皇御一行は１８日までの５日間、管弦・和歌会・舞楽・剣舞を見物。その後、銀５５３０両余・米８００石を近江国高島郡８００石の地を貢物として秀吉から提供を受けた。天皇御一行は、いたりつくせりの中、興奮は最高潮に達した。

そんな情況で大領主である前田利家・宇喜多秀家・豊臣秀次・豊臣秀長・徳川家康・織田信雄は天皇の眼下で連署をもって秀吉へ臣従を誓った。また、中堅領主２１名も同様の誓詞を関白に出された事が報告されていた。

「ふむ、流石は大殿。人を驚かす技は、いまだ衰えぬか。同じ事を考えた者もいたであろうが、誰も真似出来ぬな。故に天下人の道を歩めたと言えようか。他に変わった点は無かったか？」

「扇子で剣舞の舞を演出した秀俊殿に、天皇は大変な喜びようだったと聞き及びます。またそれを拝見した関白ならび諸侯も大絶賛をされたとの事」

「羽柴秀俊かぁ。随分甘やかされた糞餓鬼と聞くが、百聞は一見に

劣るとも言う。基次、そなた教育係として仕えてくれぬか？」

「御意」

この男の関心を買った事で、歴史は新たな道を紡ぎだす・・・。

天正１６年（１５８８年）　４月１４日　１８：００　同時刻

「流石は、寧々様の養育は違いますな。武門の子らしく、素晴らしい剣舞でした。佐吉かんぱく、仕りましたぞ」

「・・・殿下！　如何なされましたか？」

密談中の石田三成（佐吉）は豊臣秀吉の応答が無い事に不審に思い近寄った。

芯の臓の辺りを押えながら突っ伏した豊臣秀吉が呻く。

「くそ。まただ・・・儂はまだ死ねぬ」

聚楽亭の奥で、心臓を鷲掴みされる痛みを堪えながらもまだ諦めてはいなかった。

石田三成に介抱されながら、豊臣秀吉の呼吸は平常を取り戻していった。

「安心せい。発作は収まってきたようだ。儂が死ぬ前に幾つか手を打ちたい。そなたの力を借りるぞ」

「殿下！　何を弱気に。殿下にはまだまだ為すことがございます」
石田三成が弱気となった秀吉を諌めた。豊臣秀吉は夢をくれた恩人であり父であった。

「ごほ、ごぼ。豊臣家の跡継ぎは、実子から出す。止むを得ない場合は、浅野一門でなく木下一門から出すつもりよ。寧々にすまないが、自分と近い血が流れぬ者に継がせたくはないのだ・・・」

羽柴秀俊は秀吉にとって寧々（正室）懐柔の道具であり、愛玩動物の様な存在であった。大恋愛で結婚した寧々は、子供が生まれない事を大変悩んでいた。子供が生まれやすくなるという噂が有ればすぐ試し、祈願もしていた。だが、無情にも子をなすことは無かった。その為か寧々が身体を崩す事があり、秀吉自身も心配していた。そこで寧々の気持ちが和らぐならばと、寧々一族（浅野一門）から子を貰い受けたのだった。

「は、はぁ」
動揺隠しきれず、どもり気味に答えるのがやっとだった。石田三成は傲慢ではあるが才気溢れる羽柴秀俊こそが、次の後継者と観ていた。それだけに衝撃的な発言であった。

「そこで、信長公とお市様の血を受け継ぐ茶々を室に設けたい。そちに異存はあるまい？」

「…御意。ですがあれは噂では無かったのでしょうか？」
石田三成は、近江出身であり近江衆と呼ばれる緩やかな派閥に属していた。茶々も近江出身でもあり、三成は度々便宜を図っていた。秀吉も三成と親しい事を知っていた。茶々に悪い虫が付かないように、目付として言いつけたのはほかならぬ秀吉だったからだ。

「ふふふ、あれは知る人ぞ知る事実よ。儂は観たのだ、信長公とお市様の逢瀬をな。信長公は能力を示めされすれば、人格身分関係なく用いる方だった。だが試されるのだ。儂も度々死地へ派遣されて、何度おっちぬかと思ったか解りゃあせん。故に今の儂があるちゅう訳だ。商人の子がここまで出世できたのはそれ故ぞ」

「商人の子でござりますか、確か農民の子やご落胤とおしゃっていたように記憶しますが」

「儂は、堺の豪商と公家の娘の間に出来た捨て子だ。それを知った時は驚愕であったぞ。それ盾に資金調達もしたがな」

「では、その家から子を貰い受けては如何でしょうか？」

「すでに、後顧の憂いは絶っておる。運が良かったのは、同じ境涯に至った血族に秀長がいた事かのぉ」

豊臣秀吉や豊臣秀長が生まれた頃の京都は荒廃し、公家ですら食に困るありさまであった。実父は財で地位を買うつもりが、地方領主（戦国大名）の献金によりその計画は破たんした。そこで止む無く遠縁の木下家に養子として出した。尾張支店の奉公人として木下家の者もおり、養育費を出すには都合が良かったのだろう。また尾張は、距離だけでなく堺に匹敵するほど発展した商業地で有る事から、後継者育成にも最適であったのだ。そのお蔭で、足軽育ちにも関わらず、二人とも高い教養を身に着けていた。

「話はそれたが信長公の純血ならば、儂が子を為す事も可能であろう。ふふふ、ははは」

石田三成は呆然としたまま豊臣秀吉を残し退席した。
（羽柴秀俊様の事をあれだけ可愛がられていたのは、演技だったとでも言うのか）
（何時からか変わってしまったのだろうか。天下太平の世を創りたいと熱く語っていたあの殿下とは…とても思えぬ。だが儂は。許せ、茶々）

巷では「猿王」の生まれ変わりであるとの噂があった。器用さから指が６本あったとか、容姿が猿に似すぎているとか似てないとか。だからあれだけ側室がいても子ができないのだ。やはり猿と人の間に子は生まれるはずがない。そう揶揄されていたが、それでも豊臣秀吉は直系の跡継ぎを得ることに望みを持っていた。

このとき豊臣秀吉５１歳、浅井茶々１９歳。茶々と石田三成との恋は終わりを迎えようとしていた。

石田三成に茶々説得の命が下ったのは、それから暫くの事である。

第二話　天正１６年（１５８８年）　４月　天皇との会談（後書き）

茶々の両親は、織田信長と浅井お市の方説を採用。

豊臣秀吉の出自は、著者の見解です。

身分の高い側室への執着・幼少時の高い教養・蜂須賀正勝などの国人領主との関係性ｅｔｃ

地方領主…戦国大名の事を指す。

中堅領主…１０万石以上の大名を指す。

大領主……５０万石以上の大大名を指す。

国人領主…独立した小規模大名の事を指す。

第三話　天正１６年（１５８８年）　５月　茶々の覚醒

天正１６年（１５８８年）５月１日　サナギから蝶へ

「茶々、殿下の命があった。関白の室に入り、子を設けよとの事」
感情を極力挟まないよう淡々と言う三成。

「ほほう。私めに死ねと言わのかえ、三成！」
鬼も殺さんといわんばかりで睨みつける茶々であった。

「済まない。儂もそなたと添い遂げたかったのだが…そうもいかなくなった」
三成は、愛する人（茶々）も父（秀吉）もどちらも選びたくはなかった。

「なぜ、私と共に往こうと言って下されぬのです。そういってくだされば、喜んでお供しましたのに。なぜに・・・」

「済まない。儂からは、それしか言えぬ」
女人を連れて逃亡しても、秀吉ならば草の根を別けてでも探し出そう。捕まり茶々に逢えなくなるくらいならば、秀吉の側に置いた方が安全ではないか。いずれ茶々が子をなせば蟠りもなくなるはず。一族郎党の事も心配しなくてもよい。それがお互いに一番良い事なのだ。そう三成は自分と折り合いをつけていた。

「なぜ気にかけて下されたのです。あんまりです。どうしてあの時、母上の後を追わせてくれなかったのですか？」

「天下泰平の為、必要なのだ。茶々、豊臣家の世継ぎを生んでくれ。

頼む」

夢見がちの年頃であった茶々に突き付けられた、おぞましい現実がそこにあった。

愛する人に他人の子を産んでくれと懇願されたのだ。正気を保てというのは難しいというものである。茶々の脳は現実を拒否するかのように愛しい石田三成の懇願を聞きつつも、意識が遠のいていくのだった。朦朧とする意識の中で母上の声を聴いた気がした。

「愛しい愛しい、茶々。聴いてちょうだい。貴女が妹を守るのよ。気位の高い貴女には難しいかも知れないけど。生きて乱世を生き抜いて」

（母上とのお約束、お茶々けっして忘れた訳ではありませぬ。ですが私は…）

その日、心の中で亡き母（お市の方）と愛しい男（石田三成）との別れを告げたのだった。

「いいわ、貴方の言うとおりにしてあげます。ただし、貴方はこれから私の臣下よ。逐一報告を私に入れる事。いいわね、三成！」

「ああ、解ったそうする。茶々、気落ちするなよ。できるだけ会いに行くからな」

そういうや三成は足早に去っていた。

「三成の馬鹿」

三成が去った方角を見つめながら茶々の瞳から雫が流れ、口からは言の葉がこぼれた。

（貴方の辛い立場も解りますわ。でも悔しいではありませんか、他人に翻弄される人生なんて。私はこれから、自分で人生を切り開い

ていきます。さよなら、愛しい人）

天正１６年（１５８８年）５月吉日　浅井茶々、豊臣秀吉に嫁ぐ。

豊臣秀吉を眼にした瞬間、母上（お市の方）が語っていた事をフラッシュバックの様に甦った。

「兄との逢瀬を観られたの。あいつは、きっと私を手籠めにして織田家に取り入ろうとしたのよ。汚らわしくて、今でも身の毛がよだつわ。死ねばいいのよ、あんな男は！」

「よう来た、よう来た。来たという事は儂の子を産んでくれるという事でええかの？」

秀吉の声で現実に戻った茶々は、憎々しげ睨みつけ命令した。

「猿、無礼である。私めは貴様の主筋、信長公妹お市の方の子であるぞ。控えい！」

家臣一同どよめきあり、取り押さえようとした家臣を秀吉は手で静止させた。

そして上座から降り、茶々を上座に座らせたのだった。

「無礼を働く私めを斬れぬか猿。そんなに私めが欲しいのか。くくっく。

天下の猿に、これだけの無礼を働いても殺されぬ地位か。よかろう。

そなたの室に入ってやる、喜べ猿よ…ははは」

気位高く優しい茶々が、壊れ始めた瞬間であった。

（死神が首目掛けて鎌を振り上げた、そのときこそ耳元で囁いてや

るわ。あれは、お前の子ではない。お前が最も信頼していた三成との子だとね。あの猿がどんな顔をするか今から見ものだわ、ははっは）

その後、孝蔵主（大奥を取り締まる事務次官）主導の元、盛大な婚儀は滞りなく終わった。

席上にいた石田三成を観る事は一度も無かった。

この時とき石田三成２８歳、浅井茶々１９歳。

婚儀と同時に、豊臣秀吉は大仏殿の基礎の儀を行わせた。

藁にも縋る思いで神仏に願いを込め、実子誕生を願ったのだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8483x/

秀吉の後継者

2011年10月28日11時04分発行